

よどじん

のれんをくぐると、足元に広がるカラフルなタイル貼りの玄関。
サンダルを脱ぎ捨て、ガラガラッと勢いよく扉を開くと、
今日もやさしい笑顔が迎えてくれる。

「きたでえ。」 「はい、いらっしやい。」

そう、ここはまちのお風呂屋さん。
新高5丁目にある銭湯「第二末広湯」。
笑顔のあるじは、

「番台一筋60年」 井上和佐子さん

番台から見つめ続けた60年

昔ながらの銭湯が数多く残る淀川区
の中でも、約90年という随一の歴史を
ほこる老舗銭湯。

和佐子さんのおばあさんが昭和の初
めに店を譲り受けてから約80年、女性
3代で番台を引き継ぐ。

先代であるお母さんから番台を受け
継ぎ、子ども3人を育てながら、雨の日
も風の日もそこから見つめ続けた和佐
子さんの60年。

その瞳にはいったい何が映っている
のだろう。

「いろんなことがあったねえ」

和佐さんがまだ番台に座る前、戦
時中の話。「道路を挟んだ向かい側の建
物が空襲で焼けたときは大変だった。大
事な着物が燃えないように、私の母が
銭湯の湯船に浸けてしまったんだけど、
結局水浸して駄目になっちゃった(笑)」

当時、和佐さんは、学徒動員として
十八条あたりの工場で軍服のボタン付
けの仕事をしていたそうだ。「いつのま



▲湯広末じゃなくて末広湯。
右から読むんですね。

にか手芸が趣味になって、番台でもい
ろいろと編んだもんよ。」と懐かしそう
に振り返る。

変わりゆく時代

「昔はその神棚の横にテレビを置い
てたの。そしたらみんなが見に来ちゃっ
て、人があふれかえってたわね」

「小さい子どももたくさんきてて、よく
その身長計で背を測ってたわ。すご
い年代物でしょう(笑)。」

銭湯という場所が人をつなぎ、時を
つなぐ。

助け合って生きてきた

風呂のある家庭が少なかった頃は、
赤ちゃんを連れてきたお母さんがゆっく
りお風呂に入れるように、和佐さんが
赤ちゃんを抱っこ。今でいう「一時保育」
がここでは自然に行われていた。銭湯と
いう場所が人をつなぎ、心をつなぐ。



▲色とりどりの小さ
なタイルをかわい
くあしらう玄関



▲みんなの成長を
見てきた身長計



続 番台から 見つけた 60年



▲淀川区内の銭湯で
利用できる共通入
浴券。おトク。

